

Deutsche
Grammophon

ST 33 MG 2458
2530 398

JOSEPH HAYDN

Sinfonia concertante B-dur (in B flat major)

Symphonie Nr. 90 C-dur (in C major)

WIENER PHILHARMONIKER · KARL BÖHM

STEREO





ヨーゼフ・ハイドン
(1732-1809)

Side A:

**ヴァイオリン、チェロ、オーボエ、ファゴットと管弦楽のための
協奏交響曲 変ロ長調 Hob. I: 105**

1. Satz: Allegro (9' 44)
2. Satz: Andante (6' 06)
3. Satz: Allegro con spirito (6' 26)

Side B:

交響曲 第90番 ハ長調 Hob. I: 90

1. Satz: Adagio — Allegro assai (7' 27)
2. Satz: Andante (8' 37)
3. Satz: Menuett — Trio (5' 23)
4. Satz: Allegro assai (5' 01)

ライナー・キュヒュル (ヴァイオリン)

ロベルト・シャイヴァイン (チェロ)

カール・マイヤー・ホーファー (オーボエ)

ディートマル・ツェーマン (ファゴット)

ウィーン・フィルハーモニー 管弦楽団

指揮: カール・ベーム

プロデューサー: Dr. エレン・ヒックマン

ディレクター: ヴェルナー・マイヤー

レコーディング・エンジニア: ギュンター・ヘルマンズ

データ: 1973年5月7日-12日

ウィーン、ムジークフェライン大ホール

ジャケット表: 「アイゼナッハのエステルハーツィ宮殿
(アイゼナッハ、ハイドン博物館蔵)」

●演奏者について

このレコードの協奏交響曲で独奏を担当している4人は、みなウィーン・フィルの各セクションの首席であり、ヴァイオリンのライナー・キュヒュルは、ウィーン・フィルのコンサート・マスターでもある。そして、オーボエとファゴットからは、いかにもウィーン・フィルの管楽器らしい古雅なひびきをききとることもできる。

指揮をしているカール・ベームは、1894年にオーストリアのグラーツで生まれ、グラーツとウィーンで学び、1916年から指揮者として立つようになった人。ウィーン国立歌劇場の総監督の地位についていたこともあり、ウィーン・フィルとは、ことに親密な関係をもっていて、ウィーン・フィルからは、もっとも尊敬される指揮者とされている。1963年秋には、ベルリン・ドイツ・オペラの指揮者として来日したこともある。

このベームの本領は、なんといってもドイツ・オーストリアの音楽にある。そのベームの指揮は、細かい神経を通わせた筋の太いもので、音楽に大きな安定感をあたえる。それは、つねに端正で正しいがなく、重みと歌をもっている。交響曲その他におけるこのデリケートな歌の感覚は、まさにオペラ指揮者としての大分と体験の結果にほかならない。しかも造型は、きわめてがっちりしていて、整然としたものになっているのである。

ベームのレコードでは、ウィーン・フィルを指揮したものやベルリン・フィルを指揮したものが主体になっている。ウィーン・フィルを指揮したときには、このオーケストラの本来の持ち味のしなやかさを生かしながら、大へんにのびのびとしたものになっている。もちろん、そこに巧みに緊張感も盛りこまれている。その肌ざわりのよさ、ふくよかさ、そしてときにあらわれるはげしい主張は、他の指揮者からはなかなかえられないものである。

●ヴァイオリン、チェロ、オーボエ、ファゴットと管弦楽のための協奏交響曲 変ロ長調 Hob. I: 105

ハイドンは、マンハイム出身のヴァイオリニストで、また音楽事業家でもあったベーター・ザロモンの招きで、1791年1月にはじめてロンドンの地を踏んだ。そして、1792年6月末ごろにロンドンを去り、ウィーンに帰ったが、このイギリス滞在中に、1791年と翌年の2月から6月までの12回づつのザロモンの主催する演奏会にオーケストラでチェンバロ（またはピアノ）を担当して出演し、合計6曲の新作の交響曲やその他の新作や旧作をロンドンに紹介した。そのなかの、1792年3月9日のこの年度の第4回ザロモン演奏会で、協奏交響曲変ロ長調は初演された。そして、この協奏交響曲は、次の3月16日の第5回演奏会でも再演され、さらに、ハイドンの第2次イギリス滞在のときの1794年2月24日の第3回ザロモン演奏会でもとりあげられているので、当時としてはかなり歓迎されていた作品だったのだろう。

この協奏交響曲は、オーボエ、ファゴット、ヴァイオリン、チェロを独奏楽器とする。これに対する管弦楽は、フルート1、オーボエ1、ファゴット1、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部という編成をとる。

協奏交響曲（フランス語のサンフォニー・コンセルタント、イタリア語のシンフォニア・コンチェルタンテ）は、イタリアで生まれてドイツでも流行した合奏協奏曲に、当時出現した交響曲の様式を融合させたもので、協奏曲のように独奏者をおくが、協奏曲ほどには独奏を誇示せず、全体的にはむしろ交響曲に近い構成をとっている。独奏者は2人から9人くらいまであり、楽章の数は、大体のところ2つあるいは3つとなっている。

この種の曲が生まれるには、管弦楽の編成が大きくなって、すぐれた奏者をおいて整備されたものになっていることが必要だった。こうして、マンハイム、パリ、ロンドン、ウィーンでそうしたものがとくに流行した。

ロンドンでは、大バッハの息子のクリスチャン・バッハが協奏交響曲を書いていし、ザロモン演奏会に対抗するプロフェッショナル・コンサートでも、協奏交響曲がとりあげられていたので、ハイドンも、こうしたことに刺激され、ザロモンのヴァイオリンの腕前を生かすこととして、協奏交響曲を書くことになったらしい。もともと、ハイドンは、交響曲で特定の楽器を独奏ふうを使用することを好んでいたし、また楽器の対比的効果にも関心をもっていたので、協奏交響曲を作曲するのに野心を燃やしたとも考えられる。

第1楽章 アレグロでソナタ形式をとる。その冒頭でフルートと第1ヴァイオリンによって示される第1主題には、この時期のハイドンが好んだ装飾音をおく進行がある。第2主題は、模倣的な書法をおいてあらわれる。そして、この第2主題は、すぐに独奏楽器によってくりかえされる。そのあと、総奏による小結尾がくる。このように、第2主題が早くも独奏楽器で奏されるというのは、当時の協奏ふうのソナタ形式では異例のことであった。つづいて、いわゆる独奏提示部となり、独奏楽器群が加わって、これまでのことを飾りたてながら反復する。展開部は、主として第1主題を扱っている。そして、独奏ヴァイオリンによる第1主題の登場で、再示部に入る。結尾に入る前には、四つの独奏楽器による第2主題に基づくハイドン自作のカデンツァがある。

第2楽章 アンダンテ、ヘ長調で、ソナタ形式をとる。抒情性をたたえたおだやかな楽章であり、展開部は、第1主題を用いてはいるが、ホルンの持続音の上で独奏楽器群を動かす4小節だけの短いものである。

第3楽章 アレグロ・コン・スピリットで、自由なソナタ形式をとる。いきなり管弦楽で第1主題が示されるのも異例だし、アダージョのレチタティーヴォをしばしばおいているのも珍らしい。そして、ソナタ形式といっても、かなりその公式からはなれたものになっている。

●交響曲 第90番 ハ長調 Hob. I: 90

ハイドンの第90番から第92番までの3曲の交響曲は、パリとマルセーユの間の郵便事業を独占していたフランスのドーニ伯爵からの依頼で1788年に作曲された。ところが、ハイドンは、この1788年1月にエッティンゲン＝ヴァーラ＝シュタインのクラフト・エルンスト公から、まだ誰も所有していない新作の交響曲を3曲手に入れたといわれ、翌年に同じく第90番から第92番までの3曲の楽譜をエルンスト公に売り渡してしまった。ハイドンがなぜこのような二重販売をしたのか正確なことはわからない。

とにかく、これらの3曲には、ハイドンよりも若いモーツァルトからの影響があらわれている。そのなかの第90番は、とくにフランスの聴衆を意識した面をみせもする。管弦楽の編成は、フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部となっているが、トランペットとティンパニは、あとで加えられたらしいとされている。第82番以降のバリからの注文による交響曲でトランペットとティンパニの使用が次第に目立つようになってきていて、そろそろこの2種の楽器をハイドンは、交響曲には不可欠と考えはじめたのでもあろう。

第1楽章 アダージョの序奏とアレグロ・アッサイの主要部とからなる。この序奏に含まれるハイドン好みの装飾音をもつ進行は、次の第1主題でそのまま使われている。このように、序奏と主要部は、密接な関係をもつようになってきている。主要部は、もちろんソナタ形式をとる。その展開部は、ハイドンの成熟さを感じさせる。

第2楽章 アンダンテ、ヘ長調で変奏曲の形をとる。この少し前の時期あたりから、ハイドンは、緩徐楽章を変奏曲にすることを好んでいる。そして、これらの変奏曲に共通する手法として、短調の変奏を一つ終りのほうにおく。

第3楽章 メヌエットで、とくにテンポの指定をもっていない。フランス趣味に合うような優雅さと洗練さをもっている。トリオは、オーストリアの舞曲を思わせるが、材料的にはメヌエットと関連をもつ。

第4楽章 アレグロ・アッサイで、自由なソナタ形式をとる。ソナタ形式といっても、第1主題を重視したもので、いわば単一主題のソナタ形式になっている。最後の結尾に入る前に4小節の休止があるが、この休止は、結尾の導入とハ長調から変ニ長調への転調のために、きわめて効果的である。ffで休止に達し、休止後ppではじめるという計算も、立派なものである。

【解説/門馬直美】

